

第6号(2008.12.01 配信)

新 JICA と協力隊・その3

新 JICA 発足に際し、本部が所在する新宿メインタワーに、旧 JBIC の円借款部門が千代田区竹橋のオフィスから移動してきました。一方、メインタワーに主な機能を置いていた協力隊事務局や緊急援助隊事務局等が入替わるように竹橋に移りました。来年秋に本部の全機能が、四ツ谷駅に近い千代田区二番町の新ビルに集中入居するまでの臨時的措置と聞いています。新宿、竹橋それぞれのスペースやオフィス配置事情によるのでしょうか。

一年ほどの臨時措置とはいえ、本部機能が集まる新宿が「中枢」で、竹橋がいわば「従」という感じは否めません。この現状を、決して僻(ひが)目に見ているわけではないけれど、協力隊や緊急援助隊が、少なくとも当面、新 JICA 中枢から外れて、いわば「外縁」部にあるとの印象を容易に拭き切れませんか？物事は最初の一步が肝心です。特に事業体の合併・統合は初期の動きが重要ですが、「中枢」の新宿の情報、離れている竹橋に直接かつ即時に響いてくるのでしょうか？

協力隊員 OB の現役職員によると、「中枢」スタッフの間には、今後の JICA の主軸に資金協力事業ありと受け止め、協力隊やシニア・ボランティアの事業は、ほんの脇役、徐々に周縁化の方向にあるのではなどとうそぶく空気さえ広がっているといえます。率直に言って、私は、そうかもしれない、と思います。新 JICA が掲げる「ビジョン」 - すべての人々が恩恵を受けるダイナミックな開発 - をはじめ、グローバル化課題への対応、人間の安全保障実現など4つの「使命」の具体化と実行に、真正面から取り組みず後れをとっては、そうなりかねません。正直の話、上記のオフィス配置が示すように、一時的にせよ、「中枢」から外され「従」の立場や「外縁」に甘んじては、脇役から周縁化に向かう恐れはないと、胸を張っていえないと思うからです。

何も、協力隊事業が新 JICA の支柱の一つであるべしなどと言っているわけではありません。歴史的に、また派遣規模の上でも、我が国の国際ボランティア事業の代表格として存在感を発揮してほしいと考える。数ある NGO 諸団体・組織とも連携しながら、新 JICA の中で際立つ特色と実績を示してほしいと思うのです。新 JICA が重視する「現場主義」は協力隊の持ち前のはず。それには、新 JICA が「メッセージ」として示す方針・方向を踏まえ、協力隊活動が活気溢れて、文字通り「ダイナミック」な展開を続けていく努力を、協力隊事務局にはもちろん、協力隊経験者の職員に、また JOCA をはじめ隊員 OB/OG の諸組織にも強く求めたいのです。なぜ、その思いを深くするか。国際諸事情や南北格差、地球環境問題等々がかかってない規模で広く知らされている今も、協力隊の応募者、合格者は必ずしも増えていません。派遣要請は春、秋の募集期とも約1,200人に上るけれど、合格者はその半数余の6~7百人。特に要請が依然として多い農林水産部門は、相変わらず要請の充足度が著しく低い。近年は、加工、保守操作、土木建築の工業・建設関連部門は、そもそも応募者が要請数に届かない。以前から続く要請と参加希望者のミスマッチが解消されていません。今日の日本は少子化が予期以上に進行中です。現状から将来を見据えた募集・広報戦略の見直し、組織募集の組み立てなど、周縁化を払拭する知恵と対応策をぜひ練ってほしいものです。現在の募集・選考の一連のシステムは、1970年代に当時の事務局スタッフが知恵と努力を結集させて作り上げたものでした。「システム設計」という言葉が熱気を帯びて飛び交っていました。30年余が経過しています。「協力隊は一つの運動体だ」といった先達がいきました。「運動体」は一人一人の発意が結びあい活発に動き前進していくもの。そう認識して、旧態踏襲でな

い、発展的な総点検・新設計に、熱気を持って乗り出そうと思われませんか？

焦点を変えましょう。前回の(その2)で「広尾センター」について記しました。数少ないJICA固有の施設です。協力隊事業の国内展開にもっと大胆に活用したらいかがですか？

この一年に、職員、関係スタッフを除く外来者＝民間人、NGO、学生、青少年、イベント参加者等が延べ10万人を超えたとき聞きました。このような多数が集まる施設は JICA でトップクラスです。講堂あり広間あり教室あり、音楽会や映画会はもちろん各種の会議・会合ができ宿泊も可能という、多種多様なイベントや集会に最適な多目的活用ビルです。しかも、何事も自前でできる。自前だからこそ10万人を超す多彩な来場者が集まったはずです。

もっと活用を、というには根拠があります。時折訪ねてみると、ひっそりしています。特に「地球ひろば」と大書された、ビルの角＝正面に向かって左手の広間は、もっと活気があるべきではないか。取っ付きが冴えないと全体の活気に響きます。政治家の視察や不動産屋の言い分に対応するにも、事実をもって、多面多様な活用と賑わいで応えるのが正道ではありませんか。

それとは別に、最近気掛かりでならないのは、新 JICA のオフィスの構えです。出入りの厳しさ、外来者への対応など。今日の東京の中心部で、不断の警備に万全を期す必要は十分に承知の上で、あえて苦言を呈する理由は？ 協力隊事業や国内連携事業の来訪者たちは、フツの青年、学生であったり自治体のスタッフや NGO、社会的な諸活動団体の関係者です。協力隊参加の希望者や相談の相手や、身近な申請者や報告者もいるでしょう。官庁や警察などの警備態勢とは本質的に違はずです。よりオープンに、より気楽に対面し話し合う姿勢がどうして考案されないのでしょうか。さすが JICA、さすが協力隊、といわれるような対応の仕方を、ぜひ開発してほしいと切に期待します。

関連して提言します。協力隊事務局は、広尾センターに本拠を置くことを真剣に考えてはいかがですか？ その気になればビルの一部増改築・改装も不可能ではないでしょう。独特の警備態勢、応接方式を開発し、多数の青年、学生、NGO 等々が一定のルールのもとに、より自由に往訪・参集できる、新 JICA の、文字どおりの“ひろば”を目指すのです。ネットで対応しネットで示唆、要請する、どこか他人行儀な間柄でなく、人間同士が互いに顔を合わせ表情をたたえて話し合い論じあう、そんな親身な間柄を育てていくのです。協力隊の現地活動は、いつでもどこでも、そうだったではないですか！ 日本でそれができないはずはありません。協力隊だからこそできる最も人間らしい、人間同士の関わり合いではありませんか！

もしご異存がなければ、緊急援助隊事務局も広尾を本拠にして、協力隊事務局と共同であれ単独であれ、新 JICA の「メッセージ」に即して、国際連帯の実を上げる企画と演習を計っていかれてはどうでしょうか？

あれこれと、いろいろな角度から主張し提議してきましたが、協力隊事業、国際ボランティア活動が、新 JICA の組織と諸事業の中で、特異であれ貴重な存在として、今後とも発展し一層活性化されるよう、心底から願ってやみません。

(12月 1 日記。国際サブロー)